何も都会と比較する必要はないんです

東京から移住した
松塚　研二さん
　　要子さん
（鷹ノ巣在住）

移住
この町で暮らす

この町に生まれた人がこの町で暮らし
一度は町を離れても
やがて生まれ育ったこの町に戻り、この町で暮らす
この町に魅力を見つけた人が、この町に移り住む

こんな町を目指して町は取り組みを進めています
そんな中、昨年東京からこの町に移り住んだ人がいます
「何で葛巻なんかに来たの？
と声をかけられることが不思議なんです」というご夫婦
この町に住み続けている私たちが
感じることのできない町の魅力って何でしょうか
そして、移り住む方々は何を求めているのか
お二人にお聞きしました

素朴で豊富な大自然を求めて葛巻に来ました

（右）牛がかわいくて仕方ないお二人。子牛の名前は、山手線の駅名順につけられています。（左上）家族でしっかり計画を立てて移住した松塚さんご夫婦。スケジュール表には、和牛の頭数など詳細な計画がありました。（左下）週２回、夜に町内の仲間と体育館に集まり、バレーボールで楽しく汗を流す要子さんら。

農業の土台を準備してあげたい

「生き物ですから、休みがないのは覚悟しています。でも何より牛に癒される毎日です」と松塚研二さん（55歳）。妻の要子さん（56歳）も「朝、牛舎に歩いていくのがとても気持ちいいんです。寒さも大丈夫、平気ですね」と輝く笑顔が日々の充実を物語ります。

松塚さんご夫婦は和牛の飼育を始めるため、星野地区の小さな集落「鷹ノ巣」に昨年5月、移住しました。

エンジニアとして働いていた研二さんは東京都出身。長女、長男が畜産を学ぶため大学へ進んだことがきっかけで、「将来のために環境、土台をつくってあげたい」とご自身も就農を決意。その夢を実現するため、東京での「農業人フェア」などに何度も足を運び情報を収集。2～3年かけ家族で具体的な計画を立てました。

まずは研二さんが単身で、平成19年から3年間、和牛の飼育を学ぶため奥州市江刺区で研修。その後、岩手県内でいよいよ就農するため畜舎を探していると、紹介されたのが鷹ノ巣でした。「畜舎と放牧できる草地、住む家と条件が揃っていました」と研二さん。借り受けた畜舎で、現在は6頭の和牛を飼育。また、お隣りに住む大家の中村喜一さんの乳牛の飼育を朝晩手伝い「どっぷり牛飼い」の毎日を過ごしています。

要子さんの夢は農家民宿の経営

要子さんの夢は、「農家民宿を経営すること」。研二さんが江刺で研修している間、要子さんは東京で仕事をしながら料理の勉強もしていました。松塚さんご夫婦の夢は一つではなく、それぞれにあるのです。

またスポーツが大好きな要子さんは、地域のバレーボールの練習に参加し、葛巻での活動の輪も少しずつ広がっています。

松塚さんご夫婦のIターンは、定年後「ゆっくり暮らしたい」ではなく「農業をやるため」。「Uターン者は基盤があるところに来るからいいんです。私のようなIターン者はゼロから。町から支援事業を紹介してもらって牧柵を整備することができました」と、この4年間の資金面での苦労を振り返ります。

不便か便利かは人それぞれ

町民の方々から「なあして葛巻さ来たど？」と何度も聞かれ戸惑いも。「心地よさ、素朴で豊富な自然を求めて葛巻にやってきました」と声を弾ませる要子さん。研二さんも「私には農業をやるという目的があります。何も都会と比較する必要はありません」と強い思いを語ります。利便性を求めて田舎から都会へ向かうのとは全く逆で、不便と見るか便利と見るかは人それぞれなのです。

北海道の牧場で研修中の長女・萌（めぐみ）さん（24歳）と、来春学校を卒業し、社会人として県内でさらに酪農の経験を積む長男・雄大（ゆうた）さん（21歳）の成長、子牛の誕生と春の放牧が待ち遠しい松塚さんご夫婦です。